

授業の目的

言語の意味論、語用論は、現代哲学の中心テーマの一つであり、それについての基本的な知見を提供し、基本的な問題について共に考えることを目的とする。

講義内容

昨年講義した問答の観点からみた哲学的意味論を復習し、それを踏まえて「言語によって対象を指示するとはどういうことか」「言語の意味は推論とどのように関係しているのか」「我々はどのように推論しているのか」「言語行為はどのように分類され、それはどのように機能しているのか」などの問題を考察する。

授業計画

- 1、問答の観点からみた意味論を復習する。
- 2、問答の観点から語による対象の指示について考察する。
- 3、問答の観点から推論について分析する。
- 4、問答の観点から言語行為を分析する。

教科書

使わない。適宜、授業時にプリントを配付し、HPにupする。

参考文献

授業中に紹介する。

毎回の出席とミニレポート50点、
最終レポート50点

オフィスアワー：金曜午後3時～4時

キーワード

コリングウッド・テーゼ

同一性文

指示

推論主義

発語内行為

発語媒介行為

問答論的矛盾

昨年度の講義ノートはHPにupしているので、できればあらかじめ読んでおいてください。

第一回 講義 (2011/04/15)

§ 1 導入 指示の問題と述定の問題

ontology	(実在論 vs 反実在論)
epistemology	(外在主義 vs 内在主義)
theory of truth	(デフレ理論 vs 対応説 vs 整合説)
semantics	(真理条件意味論 vs 正当化主義意味論)

1、フレーゲの Sinn と Bedeutung

Gottlob Frege (1848-1925、イエナ大学教授、数学者、哲学者)

(この節は、2010年1学期第二回の講義ノート2010ss02 からのコピーアンドペイストである。ただし若干、ページ付けをより正確なものに修正した。)

A 語 の Sinn 意義 と Bedeutung 意味

(論文「意義と意味について」1892 より、引用は『フレーゲ哲学論集』岩波書店から)

(1) 固有名 (Eigenname) の意味と意義

「今や明白なことであるが、記号には、記号によって指示されるもの・これは記号の意味 **Bedeutung** と呼ぶことが出来る・のほかに、なお私が記号の**意義 Sinn** と名付けようと思っているもの・ここには**ものの与えられ方が含まれている**・が結びついていると考えられる。…「宵の明星」と「明けの明星」の意味は同じであるが、**意義**は同じではない。」(p. 34)

記号の**意味(Bedeutung)**=記号によって指示されるもの(das Bezeichnete)

記号の**意義(Sinn)** = **ものの与えられ方が含まれているもの**(p. 34)
(das, worin die Art des Gegebenseins enthalten ist)

$2 + 2 = 2 * 2$ (この意味は基数の4)

Hesperus (宵の明星)= Phosphorus (明けの明星)

三角形の中線の交点が一致するという例。

「私がここで「記号」とか「名前」とか言っているのは、**固有名**の代わりをする何らかの表示のことであり、かくしてその意味は**特定の対象(この語は最も広い範囲にとる)**であるが、決して概念や関係ではない。」(p. 35)

「固有名 Eigenname (語 Wort 記号 Zeichen・記号結合 Zeichenverbindung・表現 Ausdruck) は、その意義を表現し ausdrücken、その意味を意味する bedeuten、あるいは指示する bezeichnen。」(p. 39)

(2) 固有名と述語：対象と概念

(フレーゲの論文「概念と対象について」以下の引用は『フレーゲ哲学論集』岩波書店から)

「概念は、述語的である。これに対し、対象の名前、すなわち固有名は、断じて文法上の述語として使用することはできない。」(p. 67)

「それは緑である」

「それはほ乳動物である」

「それはアレクサンダー大王である」

「それは数4である」

「それは金星という星である」

「最初の二つの例において、ist は、繫辞として、つまり陳述のための単なる形式語として用いられている。…ここでは、われわれは何かあるものが一つの概念に属する、と述べているのであり、そして文法上の述語が、その際、この概念を意味するのである。これに対し、あとの三例においては、ist は相等性を表現するために、算術における等号のように用いられている。」(論文「概念と対象について」 p. 67)

「思想を構成する全ての部分が完結してはならず、少なくとも一つは、とにもかくにも、不飽和 (ungesättigt, unsaturated) ないし述語的でなければならない。さもないと、部分は相互に付着しないであろうから。したがって、たとえば[「数2は、概念素数に属する」における]「数2」という語結合の意義は、接着剤がなければ、「概念素数」という表現の意義に接着しないのである。そのような接着剤を、我々は「数2は、概念素数に属する」という文において用いている。それは「……は……に属する」という語に含まれているのであり、そしてこの語は、2箇所¹で補完が必要である。つまり、主語と目的語による補完を必要とする。また、これらの語の意義がこのように不飽和であることによって、初めて、この語は接着剤の役を果たすことが出来るのである。この語が補完されたときに初めて、我々は1つの完結した意義を手に入れるのであり、思想が与えられるのである。今や私は、このような語あるいは語結合について、それらは関係を意味する、という。」(論文「概念と対象について」 p. 81)

	意味 (Bedeutung)	意義 (Sinn)
固有名 (Eigenname)	対象	対象の与えられ方
述語	概念 (不飽和)	文の意義への貢献?

・補足：関数と概念の関係

「アーギュメントは、関数の一部ではなく、関数と共同して一つの完全な全体を形成するものである、ということを示すことであります。なぜなら、関数は、それだけでは不完全で、補完を要する、あるいは不飽和である、というべきものだからです。」(論文「関数と概念」

岩波、p. 7)

「概念とは、その値が常に真理値であるような関数である。」前掲書、p. 15)

B 文の意味と意義

(1) 思想は文の意義である。

・同意語の代入による証明

「まず我々は、文は意味を持つものと仮定しよう。いま文において、一つの語を、意義は異なるが同じ意味を持つ別の語で置き換えたとき、このことは文の意味に影響を与えはしない。だが、その場合に思想が代わることは分かる。なぜなら、例えば、「明けの明星は太陽によって照らし出される天体である」という文の思想は、「宵の明星は太陽によって照らし出される天体である」という文の思想とは異なるからである。… だから、思想は文の意味ではありえない。それどころか、我々は思想を意義として把握しなければならないであろう。」
（「意味と意義について」 p. 40）

（「思想は文の意義である。ただしそれとともに、あらゆる文の意義が思想であると主張するつもりはない。」(p. 103) おそらく、命令文などが念頭にある。）

(2) 文の意味は何か？ 真理値である。 真理値とは何か？ no answer？

・文は意味をもつのか？ 少なくとも意味を持たない文が存在する

「いずれにせよ、意義はもつが意味をもたない文成分が存在するのと全く同様に、そのような文が存在することは予期できるであろう。」(p. 40)

「そして、意味をもたない固有名を含んでいる文が、この種の文であろう。「オデュッセウスはぐっすり眠っている間にイタケーの海岸に打ち寄せられた」という文は明らかに意義を持っている。しかし、この文の中にある「オデュッセウス」という名前が意味をもっているかどうかは疑わしいので、文全体が意味を持つかどうか、それと共にまた疑わしい。」(p. 41)

また、フレーゲの理解では、疑問文は文の意義を持つが真理値をもたない。

・「何故我々は思想で満足しないのか。それは真理値が我々にとって問題だからであり、またその範囲内でのことである。」(p. 41)

「文の構成要素の意味が問題になるときは、常に文に関して意味を求めることが出来る。そしてこれは常に、我々が真理値を問うとき、かつそのときに限って成り立つことである。

このようにしてわれわれは、文の真理値を文の意味として承認することを余儀なくされる

のである。私が文の真理値というのは、文が真である状況、あるいは偽である状況 (den Umstand, daß er wahr oder daß er falsch ist) のことである。他に真理値はない。簡潔のために、私は一方を真、他方を偽と名付ける。」(p. 42)

「真理値」は、「文が真 (偽) となる状況」ではなくて、「文が真 (偽) である、という状況」である。

「こうして、文中の語の意味が問題になるような断定文はいずれも固有名として把握されるべきであり、しかもその意味が存在するときは、それは真か偽かのいずれかである。」(p. 42)

「あらゆる判断においては、既に思想の段階から意味 (客観的なもの) の段階への移行が行われているのである。」(p. 42)

「原注7：判断とは、私にとっては、単に思想を把握することではなく、その思想の真であることの承認である。」(p. 62)

(3) なぜフレーゲは、文の意味は事態(Sachverhalt, fact)である、と考えないのか？

文がある事態を表現していると考え、文が真であるとは、表現された事態が事実と一致することである、という真理の対応説を主張することになるだろう。しかし、フレーゲは以下のように真理の対応説を批判するので、文の意味が事態であるとは考えない。

「人は、真理は絵と描かれたものとの一致にある、と推測するかもしれない。一致は関係である。だが、これは「真」という語の用法に矛盾する。この語は関係語ではないし、また、あるものが別のものと一致するはずの、当の別のものへの示唆も含んでいない。」101 (フレーゲの論文「思想」引用は『フレーゲ哲学論集』岩波書店から)

「一致が実際に完全なものでありうるのは、一致すべきものが相等しいとき、かくして、少しも異なったものでないときに限るのである。」(p. 101)

「表象と事物を重ね合わせることは、この事物がまた表象でもあるときに可能であるに過ぎない。」(p. 101)

「何らかの点において一致が生じるなら真理は成り立つ、と定めることはできないであろうか。だが、どの点においてか。またその場合には、なにかあることが真であるかどうかを決定するためには、我々は何をしなければならないのであろうか。定められた点において――

例えば表象と実在が—— 一致しているということが「真」であるかどうか、我々は調べなければならないであろう。そしてそれにより、我々は再び同じ種類の問題に直面するであろうし、ゲームが新たに始まるかもしれない。こうして、真理は一致である、と説明しようとするこの試みは失敗する。」(p. 102)

(4) 真理のあらゆる定義の失敗

「それゆえ、真理を定義しようとする他のあらゆる試みもまた失敗する。なぜなら、定義においては、幾つかの徴表が特定されようし、そして定義を特殊な場合へ適用するにあたり、これらの徴表が当てはまっているというのが、“真”であるかどうか、が常に問題になりうるからである。こうして我々は円の中をグルグル廻っているのである。したがって、「真」という語の内容はまったく独特であり、定義不可能であるように思われる。」

「およそ真理が問われるものは、文の意義であることが明らかになる。では、文の意義は表象であろうか。いずれにせよ、真理は、文の意義と他の何かとの一致にあるわけではない。なんとすれば、さもないと真理への問が無限に繰り返されるであろうから。」(p. 103)

	意味 (Bedeutung)	意義 (Sinn)
固有名 (Eigenname)	対象	対象の与えられ方
述語	概念 (不飽和)	文の意義への貢献?
文	真理値	思想 (真理値の与えられ方?)

2、指示の問題：真理の対応説批判：Slingshot Argument

<もし真なる文が事実に対応するならば、すべての真なる文が同じ事実に対応する>という論証

<事例>

たとえば、今仮に、s「雪は白い」とt「草は緑だ」が真であるとしよう。このとき、次の4つの文は真である。これらは何らかの事実に対応しているとしよう。

- a、s
- b、 $\text{ix}[x = \text{Socrates and s}] = \text{ix}[x = \text{Socrates}]$
- c、 $\text{ix}[x = \text{Socrates and t}] = \text{ix}[x = \text{Socrates}]$
- d、t

このとき、この4の文は同じ事実に対応する。

<証明>

次の4つは、一般的に認められるとしよう。

- ① u と v が論理的に同値ならば、 u と v は同じ事実に対応する。
 ② 同じ指示の確定記述を置き換えることによって、 v から u が得られるのならば、 u と v は同じ事実に対応している。
 ③ ' $\ulcorner x[x = \text{Socrates and } u] \urcorner = \ulcorner x[x = \text{Socrates}] \urcorner$ ' は論理的に u と同値である。
 ④ もし u と v がともに真であるなら、 $\ulcorner x[x = \text{Socrates and } u] \urcorner$ と $\ulcorner x[x = \text{Socrates and } v] \urcorner$ は同じ指示をもつ。

- (1) s (仮定)
 (2) t (仮定)
 (3) $\ulcorner x[x = \text{Socrates and } s] \urcorner = \ulcorner x[x = \text{Socrates}] \urcorner$ (1 と③より)
 (4) $\ulcorner x[x = \text{Socrates and } t] \urcorner = \ulcorner x[x = \text{Socrates}] \urcorner$ (2 と③より)
 (5) $\ulcorner x[x = \text{Socrates and } s] \urcorner = \ulcorner x[x = \text{Socrates and } t] \urcorner$ (3 と4より)
 (6) (3)と(5)は同じ事実に対応する。(②より)
 (7) (4)と(5)は同じ事実に対応する。(②より)
 (8) (3)と(4)は同じ事実に対応する。(6 と7より)
 (9) (1)と(3)は同じ事実に対応する。(①により)
 (10) (2)と(4)は同じ事実に対応する。(①により)
 (11) (1)と(2)は同じ事実に対応する。(9 と10より)

「もし真な文が何かに対応していれば、真な文はすべて同じものに対応する、と示すことができる。しかし、これは対応という概念を完全に些末化する。もし対応するものが一つしかなければ、対応という関係に興味深い点はない。というのも、そのような場合常にそうなのだが、対応という関係は単純な性質 T に帰着してしまうからである」(デイヴィッドソン『真理と述定』津留竜馬訳、春秋社、p. 53)。

すべての真なる命題が、一つの大きな事実に対応しているのだとすると、対応を語る意味がなくなる。

さらに、「もし文を真たらしめる存在者としての事実を放棄するならば、私たちは同時に表象も放棄すべきである。というのも、いっぽうの正当性は他方の正当性に依拠するから。」

(同訳 p. 54)

「対応」も「表象」も放棄するなら、「指示」も放棄することになるだろう。また他方で、実在論を放棄することになる(参照、同訳 p.55)。

3、述定の問題

Davidson が、「述定の問題」と呼ぶのは、「文の統一をどのように説明するか」という問題である。

フレーゲが不飽和な概念として述語をとらえたことは、これの説明であった。しかし、Davidson は、これは問題に名前を付けただけであり、問題を解決するものではないという。

「述語は関数表現であり、それゆえに不完全ないし不飽和であるといっても、また述語が指示するものも同じように、埋められることを待っている穴ないし空所をたくさん持っているといっても、助けにはならない。存在者は、私たちがそれをどのように呼ぼうとも、存在者

である。」(デイヴィドソン『真理と述定』邦訳、p. 211)

Davidson は、タルスキによる「真理」による「充足」の説明(「充足」による「真理」の説明?)が述定の問題の解決になっているという。

4、今学期の講義計画

このように、Davidson は、指示なき意味論を提案する。述定の問題は、タルスキの真理論で解決できていると主張する。以上の議論に、我々は満足できるだろうか。

昨年講義では、Davidson は真理条件意味論を説明し、それに対する Dummett の批判を説明し、彼の主張可能性意味論を説明した。Dummett の Davidson 批判は、私には説得的であると思われたが、Dummett の意味論の問題点は、「主張可能性」の定義があいまいであることだった。そこで、次に問答の観点からの意味を考えた。

今年は、問答論的意味論の展開を前面に出して、講義したい。

(1) CT の証明を、推論主義を利用しておこなう。この中で、Dummett、Prawitz の証明論的意味論を概説し、これの検討を行う。

(2) CT に基づく意味論、同一性意味論を検討する。その中で Davidson が考えていた指示の問題、述定の問題についての別の解答を提案したい。

(3) 同一性意味論に基づいて、推論について考察する。

(4) 以上の議論を主張型の発話以外に拡張するために、サール言語行為論の再検討を行います。